

道徳教育における「畏敬の念」

光 田 尚 美*

“Awe (Ehrfurcht)” in Moral Education

(MITSUDA Naomi)

I. 問題の所在

1. 学習指導要領における「畏敬の念」の位置づけ

平成20年に告示された小学校、中学校学習指導要領において、改正教育基本法の趣旨を踏まえ、「生きる力」の理念を共有するという観点のもと、道徳教育のさらなる充実・改善のための基本方針の一つが次のように示されている。

「道徳教育については、その課題を踏まえ、小・中・高等学校の道徳教育を通じ、人間尊重の精神と生命に対する畏敬の念を培い、自立し、健全な自尊感情をもち、主体的、自律的に生きるとともに、他者とかかわり、社会の一員としてその発展に貢献することができる力を育成するために、その基盤となる道徳性を養うことを重視する」⁽¹⁾。

ここに示されている「生命に対する畏敬の念」は、道徳の内容における視点の3「主として自然や崇高なものとかかわりに関すること」に含まれるものと考えられる。ここでは、生命のかけがえのなさを知り、自他の生命を尊ぶこと、自然の生命を感じ取り、自然とのつながりを見出して共生をはかろうとすること、人間の強さや気高さを信じ、人間として生きることの喜びを見出すことなどが目指されている。そして「畏敬の念」に関して言えば、小学校高学年の視点3-(3)、中学校の視点3-(2)において「人間の力を超えたものに対する畏敬の念を深める」(中学校の視点3-(2)「自然を愛護し、美しいものに感動する豊かな心をもち、人間の力を超えたものに対する畏敬の念を深める」)と明示されている⁽²⁾。

ところで、上記のような文言や内容を確認してみると、次のような問いもまた浮上するのではないだろうか。「人間の力を超えたもの」、例えば視点3に繰り返し掲げられる「生命」、「自然」、「美や気高さ」といったものに対して、私たちはなぜ「畏敬の念」を抱くのか。そもそも

* 近畿大学教職教育部講師

〔キーワード〕 道徳教育、畏敬の念、ボルノー、尊敬と羞恥、「生」の概念

「畏敬」という感情がなぜ道徳的な価値とみなされうるのだろうか。

学習指導要領に規定されているから大切だという理解にとどまることなく、こうした根本的な問いを追究していくことが、道徳教育についてのいっそうの理解と指導の充実につながるのではないかと考える。そこで本稿では、この「畏敬」を他の諸感情と対比させながら哲学的に解明しようと試みたボルノー（Otto Friedrich Bollnow）の論考を手がかりに、「畏敬」という感情への理解を深め、「畏敬の念」を培うことと道徳教育との連関を明らかにしたい。

2. 「畏敬の念」をいかにして培うのか

すでに述べたとおり、「畏敬の念」については、道徳の内容の視点3においてそれを培うことが目指されているが、「生命に対する畏敬の念」という文言が道徳教育のねらいに付け加わり、それに基づいて道徳教育の内容が四つの視点に整理されたのは、平成元年の学習指導要領の改訂においてである。したがって、「畏敬の念」をねらいとした実践をめぐるてもいくらかの蓄積があり、効果的な指導への提案も散見される。

諸富はこの「畏敬の念」を、多様な道徳的価値のなかで最も超越的な価値であり、他の諸価値に重みを与えるものと位置づけ、道徳の授業において何としても培わなければならない価値であることを強調する。しかし実際は、それが「目に見えないもの」、もっと言えば誰かの視点に立って見ることができないものであるがゆえに扱いづらく、現場の教師には敬遠されがちであるという。そして、「畏敬の念」をまずは子どもたちが感知するために、彼らのイメージや体感に圧倒的な迫力と魅力でもって訴えかけるような資料の開発が重要であると指摘している^③。

行安もまた、「生命に対する畏敬の念」を道徳の授業において指導する際に、着手すべき第一歩は資料選定であるという。そして人物の伝記・語りや芸術作品、私たちの生き方や在り方に深く関わるような出来事などいくつかの例を挙げているが、共通するのは、こうした資料を通して子どもたちのうちに「畏敬の念」が「こみ上げてくる」、「自然と起こる」、あるいはその「思いに包まれる」という点である^④。

このような提案からうかがわれるのは、「畏敬の念」の指導は教化や訓練といった方法では成立しえないという認識である。先取的に言えば、それは資料や資料を媒介する教師との出会いを契機に、子どもたちの心に響く感動的な体験として与えられるものである。

道徳教育の方法論や実践例については、価値の明確化を軸としたもの、コールバーグ

(Lawrence Kohlberg) のモラル・ジレンマ資料を活用したもの、ハーバーマス (Jurgen Hebermas) のコミュニケーション的行為に基づくもの、道徳的行為の実現につながる諸技能 (skills) の訓練を目指したものなどがよく知られている。また、市民性 (citizenship) 教育を発展させようとする試みや、自己の行き方を探究する哲学の実践として道徳教育を構想する試みなども示されている⁶⁾。

このような実践では、子どもたちが議論や省察を重ね、言葉を尽くして相互の理解を深め合い、道徳的な判断力を高めたり、市民的な紐帯を見出したりすることがねらわれている。また、こうした経験をもとに自己の生き方を模索したり、培った力を実際の生活場面で生かしたりすることも期待される。しかしながら、先の例が示唆しているように、「畏敬」という感情が生成する体験はこうした授業展開とはいささかなじまないのではないだろうか。そうであるならば、「畏敬の念」を培うために道徳の授業はどのように構想されるべきか。このような観点からも、「畏敬」の意義を論じることは避けては通れない課題であるといえよう。

Ⅱ. 学習指導要領における「畏敬の念」の意義

『中学校学習指導要領解説道徳編』（以下、「解説」と表記）の視点3-(2)の解説において、「畏敬の念」は次のように説明されている。

「畏敬とは、『敬う』という意味での尊敬、尊重と、『畏れる』という意味での畏怖という面とが含まれている。自然とのかかわりを深く認識すれば、人間は様々な意味で有限なものであり、自然の中で生かされていることを自覚することができる。この自覚とともに、人間の力を超えたものを素直に感じとる心が深まり、これに対する畏敬の念が芽生えてくるであろう」⁶⁾。

「解説」によれば、「畏敬」とは、「尊敬の念」を抱いて対象に惹きつけられると同時に「恐れ、物怖じ」のようなものも感じ、直接に向き合うのが憚られるといった、いわば相反する情動を包含したものである。例えば、神聖な場所を訪れた際や厳粛な儀式に参加した機会、また、神聖さを体現するような人物に対峙したときなど、このような感情を抱くことはないだろうか。私たちはときに、日常生活から超え出るような高次の精神的雰囲気、すなわち「人間の力を超えたもの」を感知することがある。そこで生起されるのがまさに「畏敬」という感情だろう。

さらに、「畏敬の念」が生まれるには、「人間は様々な意味で有限なものであり、自然の中で

生かされているということ」⁷⁾が自覚されなければならないとも述べられている。また、そのためには「自然とのかかわりを深く認識」⁸⁾することが必要であるとされている。

ここでいう「自然とのかかわり」とは、人間が自然と触れ合うことによって自らの人生を豊かにしてきたという面を指している。人間は自然と親しみ、自然の生命の美しさや気高さ、神秘性に触れることによって、自らの有限性に気づかされることがある。その自覚は、「とかく独善的になりやすい人間の心」⁹⁾を省みさせ、改めて謙虚な心で自然に対しようという態度を培う。それとともに、いっそう豊かに、自然の生命に素直に感動する心もまた育んでいくというのである。

「自然とのかかわりを深く認識」ということは、自然の生命の美しさや気高さ、神秘性などとして捉えられる「人間の力を超えたもの」¹⁰⁾がいかに人間の内面的な成長にかかわるのかを、いわば直感的に受け止めることであるともいえる。そして、その直感のなかでおのずから芽生えてくるものが、「人間の力を超えたものに対する畏敬の念」¹¹⁾ということになろう。

さらに「解説」では、人間の有限性の自覚を通して生み出される感情として、「生きとし生けるものに対する感謝と尊敬の心」¹²⁾もまた挙げられている。「自然を愛護する」¹³⁾とは、「人間が自然の主となって保護し愛するということではなく、自然の生命を感じ取り、自然と心のつながりを見いだして共に生きようとする自然への対し方」¹⁴⁾とされる。「自然とのかかわり」をこのような「対し方」として認識できるということは、まさに「感謝と尊敬の心」の表れであると考えられる。

しかしながら、私たちは「畏敬の念」を、このような「感謝と尊敬の心」と同義として捉えてよいのだろうか。すでに示したように、「畏敬」には「尊敬」とともに「畏怖」という面もまた含まれている。それは、心のつながりを見いだして共に生きようというある種の樂觀さを伴った感情とは異なるのではないか。とすれば、これらの感情と比して「畏敬の念」にはどのような特徴があるのだろうか。

Ⅲ. 「畏敬」の念の哲学的解明

1. 他の諸感情に対する「畏敬」の位置

ボルノーによれば、「畏敬 (Ehrfurcht)」とは人間同士の感情的なつながりの中で最も深く人間本質へと通じている感情の一つであるとともに、同種の他の感情領域から本質的に際立っているものと位置づけられる。そしてその特徴が、「尊敬 (Achtung)」と対比させる形で示さ

れている。

人間感情を哲学的に解明するという課題に対して、ボルノーはまず、人間同士を結びつける感情に二つの基本形式があることを指摘する⁹⁵。一つは、直接的な人間の結びつきの様々な形式を生み出す感情であり、「愛 (Liebe)」や「友情 (Freundschaft)」、「同情 (Mitleid)」などがこれを象徴する。対して二つ目の形式は、「尊敬」や「敬意 (Respekt)」、「畏敬」及びそれらと結びついたその他の感情である。この二つの基本形式の相違は、大まかに言えば、その感情によって対象とどのような結びつきを求めるのか (直接的な関係をもちたいのか／距離を置いて対するのか)、その感情の生起によってどのような心的状態となるのか (燃え上がるような激しさ、あるいは温かさを感じるのか／冷静な落ち着きを得るのか) によって特徴づけられている。これらの感情のなかで「最も深く人間の内的本質へと通じ」、かつ人「間存在の本来的品位と最も密接に結びついていると思われる」⁹⁶ ものとして、ボルノーは第一に「尊敬」を挙げている。

ボルノーによれば、「尊敬」のこの特殊な位置づけは次の3つの側面によって根拠づけられている。第一に、「尊敬」には「他の感情の本質に属している独特の温かさが欠けている」⁹⁷。それは悟性的な領域により近いといえる。しかし「尊敬」は、「私によって優れていると感じられる他者を仰ぎ見る」⁹⁸ という知的な振る舞い、もっと言えばその感情連関の対象に含まれている業績に「驚嘆 (Bewunderung)」するといった「知的感情」とは全く区別される。「尊敬」の視線はあくまでも、人間存在の核心に向けられる。ゆえに、自分より同等の者に対しても「尊敬」という感情は抱かれるのである。

「尊敬」を特徴づける第二の面は、先の基本形式にも示されたように、対象と距離を置く客観的態度に求められる。ボルノーによれば、「尊敬する者は、尊敬された人間から分離されていると感じる」⁹⁹。例えば「愛」もまた、その対象を完全で高次なものとして捉えることによって、隔たりを感じ取ることがある。しかし「愛」は、この隔たりを克服しようとするところにその本質がある。対して「尊敬」は、他者に認められる (尊敬される) ことを望むことなく、他者に対して客観的に向かい合うところの隔たりをこそ、その本質とするのである。

そして第三に挙げられるのが、「尊敬」は「一定の経験に基づいて初めて生じる」感情であり、常に「既によく訓練された自己自身の判断を前提している」¹⁰⁰ という面である。ボルノーによれば、「尊敬」は生まれつき人間に備わっているものではない。ゆえに人間にとってこの感情は、まったく「自然 (Natur)」ではない。また、自然な感情が発展したもの、あるいは洗練さ

れたものというわけでもない。にもかかわらず、「尊敬」は人間存在の核心にかかわっている。いわば人間の「本質 (Natur)」に属するものなのである。

2. 「畏敬」と「尊敬」との相違

「畏敬」は、このような「尊敬」と同系の感情として解釈される。ボルノーによれば、言語的な類似性、すなわち“ehre (崇敬)”を含むことから、「畏敬」は「敬愛 (Verehrung)」と語源的には通じている⁹⁰。しかし「敬愛」が「敬愛される者」への恩義を感じて生じるのに対し、こうした直接的、個人的な関係を前提としてない「畏敬」の意義は、むしろ「尊敬」に近いといえる。けれども、「温かで強い感情」の関与や、対象に向かい合う際の「独特の内的緊張」⁹¹を有することから、「畏敬」はまた「尊敬」とも明瞭に区別される。

この「独特の内的緊張」を生み出すものが、「畏敬」の語形成に含まれる「恐怖 (Furcht)」である。しかしボルノーは、ゲーテ (Johann Wolfgang von Goethe) やカント (Immanuel Kant) の主張を引きながら、それが単なる「恐怖」として解釈されるべきではないという⁹²。というのも、「恐怖」とは本来、自分を害するかもしれない強大なものへの「恐れ」であり、人間は総じて、自分の存在が脅かされているその状態から逃れようとするのに対して、「畏敬」は、なるほど強大なものとの関係において生じるけれども、それによって脅かされているとは感じないからである。逃れようとするどころか、その関係を保持しようとするところに顕著な相違がある。このことをボルノーは、次のように説明している。

「恐怖は、自己と恐ろしいものとの間の隔たりをできるだけ大きく保つことを試みるのに反して、畏敬の念を抱く者は、畏敬すべき人の近くにとどまっていたいのである。畏敬すべきものは彼に対して威嚇的ではなく、友愛的で促進的に向かうのであり、それゆえに彼は再び愛や敬愛のような仕方で引き寄せられるのを感じるのである」⁹³。

この相反する感情によって、一方の感情が人間を掴もうとすれば他方の感情がそれを阻止しようと働くために、対象への独特の距離や独特の内的な均衡状態が生じるのであり、まさにその不安定さが「畏敬」の特殊性であるということが出来る。

3. 「畏敬」を根拠づける「羞恥」

以上のような特徴を示した上で、ボルノーは、「畏敬」の理解において問題となるのは「構成要素から理解され得ない一つの連関それ自体における根源的な両面性」⁹⁴であることを指摘

する。つまり「畏敬」の成立を、「恐怖」が「敬愛」のような感情によって和らげられた結果としてみなしたり、「尊敬」に「恐怖」が加味されることによって変容した感情として単純に理解したりすることは、「畏敬」についての理解を曖昧なものにしてしまうというのである。

そこでボルノーは、「畏敬」において抑止的に働く「物怖じ」に注目する。「恐怖」は、自分に敵対し、脅迫的に迫りくるものに対して正当な感情であるといえるだろう。反して「畏敬」は、「威嚇的ではなく友愛的で促進的に」⁹⁸ 向かってくるものに対して近づくことを避けたいと感じるわけである。この不条理さはなぜ生じるのか。

ボルノーによれば、「畏敬においては、畏敬すべきとして感じられたものへの接近を妨げるものは、恐怖にではなく羞恥に根拠づけられている」⁹⁹。端的に表現するならば、「畏敬」とは「尊敬」と「羞恥 (Scham)」の統合と捉えられるのである。

ここにおいて「羞恥」の分析が開始される。一般に「恥じる (schämen)」とは、自分が犯した行為について、これを面目ないこととして悔やむ、あるいは悲しむ感情ということができる。ボルノーはこのような「羞恥」を「振り返る羞恥 (die zurückblickende Scham)」と特徴づけている¹⁰⁰。それは、現象的には「遺憾 (Bedauern)」や「後悔 (Bereuen)」の念に近い。しかしながら、「遺憾」がその行為の不当性を「他者によって」証明されたゆえに、「後悔」がその行為の不当性を「自らが」了解したゆえに生じるのに対して、「羞恥」は個々の行動に向けられているわけではない。つまり、行為そのものを「恥じる」のではなく、これまで隠されていた人間の存在がその行為において露わになったこと、言い換えれば、私という存在がその行為を犯した、ということこそ「恥じる」のである。

このような考察から、「羞恥」もまた人間の本質に深く関わる感情であることが示唆される。とはいえボルノーによれば、過去の行為を恥じるという現象は「羞恥」の一面に過ぎない。「畏敬」との関係を捉えようとするならば、もう一つの側面、すなわち「先を見通す羞恥 (die vorausblickende Scham)」と称されるところの、これから開始される行為を抑制するものとして働く「羞恥」が考慮されなければならない。

抑制するものとしての「羞恥」については、ボルノーも取り上げているように、すでにアリストテレス (Aristotelēs) やカントによって省察されている。例えばアリストテレスは、人間の道徳的成熟との関係において「羞恥」を意義づけている¹⁰¹。それによると、若い未熟な者にとって、不当なことからや悪事を「恥じる」ことは、その行為を避ける抑制力として、あるいは社会において望ましいとされている行為へと促す外的な配慮として働く。しかし成熟し、道

徳的な洞察から望ましい行為を導くことのできる者にとっては、「羞恥」はもはや不要のものとなる。というのも、他者の軽蔑的な視線を気にすることなく、自らの熟慮の声に従うことができるからである。カントも同様に、「羞恥」を「慣習（Sitte）」の要求にかなうよう仕向けるものと捉えている⁸⁹。それゆえ「羞恥」が向かうのは世間で通用している「理（ことわり）」であって、道徳的な洞察に照らして望ましいか否かということではないとされる。

ここで論じられている抑制は、他者によって見られることに対する「羞恥」から生じている。ところが、私たちには自らが見ることに對しても「羞恥」の感情を抱くことがある。ボルノーは聖書の叙述⁹⁰を例に、「羞恥」が「理性的な思慮によっても排除されない抗し難い威力をもって、羞恥を侵害する事実の直接的な反作用によって生じる」⁹¹ことを説いている。「羞恥を侵害する事実」とは覆い隠されたものが可視的になるという意味で用いられる。つまり、「羞恥」の感情によって人間は、露見されたものに対して目を伏せるような振る舞いへと仕向けられるのである。しかもそれは、見られている他者の「羞恥」に感情移入したり、その行為を道徳的に反省して他者の代わりに恥じたりするのでは決してない。「羞恥」は無意識的に、覆い隠されたものの露見に対する予期せざる応答として生じるのである。

4. 「畏敬」における「羞恥」の意義

ところで、私たちは覆い隠されたものが何かを知りたい、見てみたいという欲求もある。にもかかわらず、露見されたものに対して目を伏せるのはなぜだろうか。この問いは、露見されたものが何であるのか、またそれを見ることがどのようなこととなるのかといった問いへと連なるだろう。

私たちを圧倒し、その目を伏せさせるものとは何か。ボルノーはそれを、「生（Leben）」として捉えている。「生」とは、「生物学的な意味ではなく、我々を支え、そして我々が我々の現存在⁹²のあらゆる瞬間にそれに密接に結びついているすべてを司る神的な」⁹³ものであり、「すべての個々の現存在を支え、そしてそれが無ければ個々の現存在が存立し得ない根底」⁹⁴であると説明される。それは、私たちがここにこうして存在していることの根底にあって、しかし単なる存立条件に還元したり、本質規定によって説明されたりしえない、究め尽くし難い神秘性を有したものである。それゆえに私たちは、「生」に対して犯すことのできない「聖なるもの（das Heilige）」を感知し、圧倒されるのである。

その一方で私たちは、この「生」を侮る力もまた有している。ボルノーも指摘しているよう

に、単なる注目するまなざしがそれを大きく傷つけるのである。「生」はその破壊の力に対して無力であり、壊れやすい。だからこそ、それを守るための覆いが必要となるのである。ボルノーによれば、この傷つきやすい「生」の求めによって生じ、それに守護する覆いを与えるものが「羞恥」である。

しかしながら、この覆い隠しは視線の完全なる遮断として機能するものではない。むしろ、隠さなければもつことはなかった価値や魅力をそこに開示するのである。この価値や魅力を感じする力が、「畏敬」である。ボルノーは次のように述べている。

「内的生は不敬なまなざしを避けるが、しかし畏敬の念に打たれたまなざしには、その隠蔽において、そしてまさに隠蔽によって、何か聖なるものとして可視的になるような仕方で身を隠す」。そして「羞恥」は、「心のより高尚な領域の上に、薄い膜のように覆いかぶさるのであって、それがこの領域を日常生活から際立たせ、まさにそれによって、この領域をその尊さにおいて開示するのである」⁹⁹。

Ⅲ. 「畏敬」を養成すること

1. 「畏敬の念」の不自然さ

さて、このような「畏敬」の感情はどのようにして培われうるのであろうか。

このことについて、ゲーテが興味深い指摘をしている。彼は『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』のなかで、主人公ヴィルヘルムに次のように語らせている。

「自然は誰にでも、生涯に必要とするものをすべて与えます。(中略) しかし一つだけは誰も持って生まれることはありません。しかしそれは、人間があらゆる面に向かって人間であるために、最も重要なものなのです。—それは、畏敬です！—」¹⁰⁰。

ここで指摘されているのは、「畏敬」は人間が人間としてあるために重要であるという意味で「自然」な感情であるにもかかわらず、生まれつきの素質として備わっているという意味での「自然」な感情ではないということである。

このような特徴は、先に見た「尊敬」に通ずるところである。私たちが「尊敬」の感情を抱くのは、例えば自らの義務の遂行に対する揺らぐことのない不屈の意志であったり、それを貫徹しようとする際の堅実さであったりと、総じて私たちの揺れ動く「生」の基層に抗して強固な意志でそれを克服しようとする人格的な面に対してである。それは、自らの直接的な利害や立場を離れ、距離をとって他者の自由の余地を認めるものであるがゆえに、時に自らと異なる

性質をもつ者や、敵対したり嫌悪したりするような相手に対しても抱かれる。このことからわかるように、「尊敬」の教育は対象と距離を置くような態度の形成、すなわち自己意識の形成過程において自らの内的な自由を獲得することが前提となる。直接的な「生」の基層から自己を切り離すことが可能となって初めて、他者の自由の余地もまた認められるからである。

しかし私たちに「畏敬の念」を生じさせるのは、「尊敬」の対象となるものが乗り越えようとする「生」の弱さであり、それゆえに守られ、覆い隠されるからこそその価値や魅力であった。それでは、「畏敬」の養成はどのような仕方でも可能となるのだろうか。

2. 「畏敬」の教育の困難

「畏敬」の特殊性から考えれば、それは確かに外部から教え込むことはできないだろう。ただ、覆い隠された「生」の傷つきやすさと同時に圧倒的な力を感知することによってのみ得られるにすぎない。もっと言えば、「生」を傷つけることに直面し、それを破壊する力に対する抑制としての「羞恥」を感じることを確かに経験することによってのみ、可能となるのである。

ボルノーもまた、「畏敬の念は畏敬すべきものを知らず知らずの間に傷つけることを經由する道においてのみ入手できる」⁸⁹と言う。したがって、子どもたちに「畏敬の念」を培おうとすれば、いまだ不敬の彼らが「生」に向ける破壊的な力の前に、傷つきやすいその「生」を晒すことが必要となる。すでに紹介され、活用されている資料においても、偉人たちの素晴らしい人生や美しい芸術作品、感動的な物語の背後には、その弱さ、傷つきやすさをむき出しにした「生」がある。その「生」に触れることが「畏敬の念」を生み出すのは、子どもたちが自らのまなざしで「生」を傷つけていることを感じ取り、思わず「生」に覆いをかけ、「聖なるもの」として守ろうとするからである。

このような感情の動きを、私たちは外部から操作することはできない。たとえ万人が感動に震えるような資料であったとしても、それに心打たれるかどうかは、感情の主体である子どもたちにゆだねられている。ボルノーは必然的に生じるものではないがその可能性に賭するといった試みを「冒険（Wagnis）」として特徴づけているが、「畏敬」の教育はまさに、私たちに「最高の冒険を要求する」⁹⁰ものであるといえる。

道徳の内容における視点3の捉え難さや指導の困難さもまた、そこにある。「解説」では、「畏敬の念」を培うための指導上の留意点が次のように示されている。

「指導に当たっては、自然や、優れた芸術作品等美しいものとの出会いを振り返り、そこでの

感動や畏怖の念、不思議に思ったこと等の体験を生かして、人間と自然、あるいは美しいものとのかかわりを多面的、多角的にとらえることが大切である」⁹⁹。

ここに示されている「感動や畏怖の念、不思議に思ったこと等の体験」は、それが意図的に引き出せるものではないがゆえに、しかもその体験は私たちを圧倒し、沈黙させるがゆえに、どのような指導を構想するかはもとより、その体験をどのように理解し意義づけるのかについても、さらなる議論が求められよう。とはいえ、道徳教育が私たちに「人間として」の在り方や生き方を問いかけるものであるならば、人間の「生」に向かう「畏敬の念」を培うことは、やはり道徳教育の主眼に置かれなければならない。

IV. 結びにかえて

本稿は、我が国の道徳教育がねらいとするところの「生命に対する畏敬の念を培う」ことの意義を、ボルノーの哲学的な解明に依拠しながら論じるとともに、このねらいを実際の指導に乘せていくことの困難さについても言及した。

ボルノーによって「冒険」と特徴づけられたように、「畏敬の念」に打たれるような体験は予測や計画のできるものではない。私たちに可能なことは、しかしその可能性に賭け、たとえ冷たい視線や嘲笑に晒されようとも、人間の「生」の現実子どもたちに出会わせることだけである。

だからこそ、活用されうる資料の調査研究がいっそう重要なものとなってくる。確かに、世のために偉業を成し遂げた人物、不屈の意志で困難を乗り越え、人々に希望を与えたような人物に出会うと、私たちは彼らの業績や人徳に敬意を抱くであろう。そのような人物の伝記や語り、あるいは具体的な功績や作品等を資料として活用することは、子どもたちのうちに「尊敬」の感情を生起させるだろう。

しかしボルノーの解明によれば、「畏敬の念」を呼び起こすものは、彼らが成し遂げた事からの背後にある人間の「生」の現実であり、それを傷つけてしまうことへの図らずの「羞恥」であった。「畏敬」の感情をこのように理解することで、「畏敬の念」に特徴的な「物怖じ」の意義を、私たちは明らかに捉えられよう。それとともに、「畏敬の念」の表れもまた、適切に把握できるのではないかと思われる。

こうした理解に立てば、成し遂げたことの大きさや社会的な有意義性の埒外で、人間の存在を根底で支える「生」に直面させるような資料の選定が必要になる。そのためには授業者自身

が、資料にどのような人間が現われるのか、それへと注目するまなざしから何を感じ取れるのかを、資料と徹底的に向き合うことで追究しておかなければならないだろう。そのうえで、「畏敬の念」を培うことはその可能性に賭すという「冒険」であるとの認識をもち、人間の「生」が開く価値や魅力との出会いの場として授業を構想することが求められるのではないだろうか。

V. 注及び引用・参考文献

- (1) 文部科学省『中学校学習指導要領解説道徳編』日本文教出版、2008（平成20）年、p.5./
道徳の教科化に伴い、学習指導要領は2015（平成27）年3月に一部改正された。「道徳の時間」は「特別の教科 道徳」に改められたが、「生命に対する畏敬の念」は引き続き総則に掲げられている。
- (2) 一部改正された学習指導要領では、道徳の内容の視点3は視点D「主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関すること」として再編され、「畏敬の念」が含まれている中学校の視点3-(2)は、「感動、畏敬の念」の項目として、「美しいものや気高いものに感動する心」をもち、人間の力を超えたものに対する畏敬の念を深めること」と示されている。文部科学省 HP「中学校学習指導要領」pdf.（平成20年3月告示、平成27年3月一部改正）
<http://www.mext.go.jp> より。
- (3) 諸富祥彦『「問題解決学習」と心理学的「体験学習」による新しい道徳授業 エンカウンター、モラルスキル、問題解決学習など「理論のある面白い道徳授業」の提案』図書文化社、2015年、pp.62-77. を参照されたい。
- (4) 行安茂「生命に対する畏敬の念をどう指導するか―他の諸価値との関連をどう考えるか―」行安茂・廣川正昭編著『戦後道徳教育を築いた人々と21世紀の課題』教育出版、2012年、pp.314-324. を参照されたい。
- (5) ここに挙げた道徳教育の方法論については、拙稿「学校における道徳教育の可能性と課題―道徳教育の方法に着目して―」『近畿大学教育論叢』第26巻第2号、2014年、pp.49-67. を参照されたい。
- (6) 『中学校学習指導要領解説』、p.52.
- (7) 同上
- (8) 同上

- (9) 同上
- (10) 同上
- (11) 同上
- (12) 同上
- (13) 同上
- (14) 同上
- (15) ボルノー、岡本英明訳『畏敬』玉川大学出版部、2011年、p.12. を参照されたい。
- (16) ボルノー、前掲著、p.37.
- (17) ボルノー、前掲著、p.38.
- (18) ボルノー、前掲著、p.32.
- (19) ボルノー、前掲著、p.17.
- (20) ボルノー、前掲著、p.40.
- (21) ボルノー、前掲著、p.54. を参照されたい。
- (22) ボルノー、前掲著、p.55.
- (23) ボルノー、前掲著、pp.59-63. を参照されたい。
- (24) ボルノー、前掲著、p.60.
- (25) ボルノー、前掲著、p.63.
- (26) 引用(24)より抜粋。
- (27) ボルノー、前掲著、p.92.
- (28) ボルノー、前掲著、pp.92-95. を参照されたい。
- (29) アリストテレス、朴一功訳『二コマコス倫理学（西洋古典叢書）』京都大学学術出版会、2002年を参照されたい。
- (30) Immanuel Kant: *Anthropologie in pragmatischer Hinsicht* (1833), Kessinger Legacy Reprints, 2009./カント、三井善止訳『人間学・教育学（西洋の教育思想 5）』玉川大学出版部、1986年を参照されたい。
- (31) ボルノー、前掲著、p.138. を参照されたい。ここでボルノーが取り上げている聖書の叙述は、葡萄作りのノアの話である。農夫になったノアは葡萄畑を作り始めるのであるが、ある日、葡萄酒を飲んで酔っ払い、天幕のなかで裸になって眠ってしまった。これを見た息子ハムは、外にいる他の兄弟（セムとヤベテ）に上着をかけてやるように言う。二人は父の着物

を取り、うしろ向きに歩み寄って父の裸を覆ってやった。決して父の裸を見ることはなかった。酔いから覚め、息子ハムのしたことを知ったノアは、「カナン（ハムの息子）は呪われよ。下僕となってセム、ヤペテの息子たちに仕えよ」と告げたのであった。関根正雄訳『旧約聖書 創世記』岩波文庫、1956年より。

③2 ボルノー、前掲著、p.139.

③3 ここで使用される「現存在（Da-sein）」は、ハイデッガー（Martin Heidegger）の用語を端緒とする、現世界のなかで自己決定しつつ現存する存在者と捉えられよう。存在がそれを通して自らを現存させる、あるいは「私が存在している」ということを了解する唯一の地点にあって、その意味で「現存在」は人間の在り方を規定しているのである。／Martin Heidegger: *Sein und Zeit*, 19. Aufl., Max Niemeyer, 2006, 松浪信三郎『実存主義』岩波新書、1962年を参照されたい。

③4 ボルノー、前掲著、pp.73-74.

③5 ボルノー、前掲著、p.74.

③6 ボルノー、前掲著、p.163.

③7 Johann Wolfgang von Goethe: *Wilhelm Meister: Die Lehrjahre / Die Wanderjahre, Gebundene Ausgabe*, Patmos-Verlag der Schwabenverlag AG. 2005.／ゲーテ、山崎章甫訳『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代〈中〉』岩波書店、2002年。

③8 ボルノー、前掲著、p.86.

③9 ボルノー、前掲著、p.87.

④0 『中学校学習指導要領解説』、p.52.